

一 治世者の仏道

兼良はその著『樵談治要』の中に、「それ仏法王法二なく、内典外典又一致也」と述べ、仏法と王法、内典と外典が同じ比重を持たねばならないとしている。殊に治世を司る者は天皇・將軍いずれも、まず「仁徳の行を先にし給え」とし、仏法を奉ずることを尊しとしながらも、座禪工夫に暇なきこと、称名安心に浸ることを固く戒めている。

二 往生伝の宣揚

本書に特徴的なことは、往生伝を重んじていることである。人の悟りと救いは、往生によつて証明される。往生の相を示し、その往生に至るまでの行業を記したのが「往生伝」であるが、この「往生伝」を兼良は仏典と並んで重要な典籍と位置づけている。念仏の行を勧める本書は念仏修行の証として、確かな往生人の行業を示す。本書下巻において前半は禅僧の念仏について論じ、後半には浄土教の相承を伝え、続けて往生伝をあげる。兼良が往生伝を重要視するのは、在家信者の関わりが多いこと、また往古の文人達に往生伝の編が多く、自身が篤信者である兼良は、これらの往生人の中に、仏教者の理想的なあり方を見出したと考えられる。

三 浄土教の系譜

兼良の祖には、月輪兼実、九条道家等、浄土教の篤い庇護者がある。また教義的にいえば、曇鸞・善導・法然、さらに鎮西・西山と次第する浄土宗の流れである。本書上下二巻の内、上巻は念仏受持の十種の勝利をあげるのを始め、月蓋長者譚など念仏の功德を称揚する。全巻の終わりに二河白道の譬えを長

文に亘つて引用し、西方願生を勧めるのである。

四 禅浄一致

下巻では、「二代の聖教をくくるに、すべて三身四土にすぎず」とし、浄土の説明、都率浄土と西方浄土の違い、諸仏の阿弥陀仏称讃を述べる。これらは簡潔で要を得たものであるが、もう一つ特徴的なものに、禅との関連がある。本書では、中国禅家の思想をあげる。隋・唐・宋の禅宗僧侶のうち、浄土教に深く帰依した人々をあげ、「禅も浄土も一心のうへのしばらくの法儀也。禅の中にも浄土あり、浄土の中にも禅あり、さらに心をはなれたる法なしと心得べし。」として、禅浄一致を説くのである。

戦乱の室町時代に生きて仏道を求めた一条兼良の著作の中に、以上のような要素を読み取る時、室町時代人が持ち得た方向性ともいふべきものが見えて来るのではないだろうか。

現代社会と浄土思想

五十嵐 隆 幸

一 はじめに 仏教思想の実践道の大綱として戒・定・慧の三学がある。これは証を得ようとする衆生の修学で戒―定―慧として順次に配列されている。また教・行・証の体系は仏が説いた教え、その教えに従つて衆生が努める修行、その行によつてさとりを証という。

第8部会

二 浄土思想から 永観は『往生拾因』で「自ら念定慧を具す」として信と進を踏まえた上で念・定・慧を具足するとし「戒定慧」を考慮して「念定慧」を強調し、この後で念仏の一行は既に四修を説いている。行観は『序分義私記』において戒は説くのではなく伝えるのであり、定は伝えたる慈悲起行、慧は法を説く智慧で浄土の法門を縁起する作法次第としている。また『玄義分私記』に教えを聞いて願行具足し他力往生のさとりに至る「教・願・証」と解釈している。

三 安心・起行・作業 浄土思想の実践面の網格としては安心・起行・作業がある。安心とは衆生が浄土への往生を弥陀に願われた際に念仏を称える三種の心で至誠心・深心・回向発願心の三心を挙げている。次に起行とは五念門を本に五種正行を示し往生を願う衆生が実践すべき行を起行という。そして作業とはどのような態度で実践するかの規定がある。この点から作業は仏教における出家者の規律としての「律」、逆に起行はさとりを求めるために自身を戒めるものとして仏から教えて頂いた「戒」(授戒)に相応し、起行と作業との関係は戒・律ではないか。

四 作業(四修) 作業の四修は長時修・恭敬修・無余修・無間修の四をいい、浄土宗の教義体系では念仏の称し方やその態度が規定となってくる。恭敬修は尊敬し大切な態度をもって修すること。無余修は他の行を交えないこと。無間修とは他の行によって間断させないこと。長時修とは前三修を一生涯続けることを意味している。『往生礼讃』で安心・起行・作業の体系が示され、四修法は安心、起行を策励する行法として位置づ

けられている。衆生に適した可能な修法に改められており、特に無余修は専ら修すること、専修念仏の根源をなすものである。明秀は『愚要鈔』で四修を御茶を立てる態度の喩えで安心は御茶の葉、起行は御茶を立てること、作業は御茶を立てるに對して丁寧な志をなし(恭敬修)、立てることだけに心を込め(無餘修)、少しも思いを貫かず(無間修)、塩梅の味を入れないうように続ける(長時修)と説明している。そして安心・起行・作業が一致して速得往生することを顕示している。四修が現代社会においては、しつけ・作法・マナー・ルールに相応し、この社会のための作法と浄土の作業(四修)と共通する点があるように思われる。

ヨーロッパでは社会に出る前の勉強で「パブリック・スクール」という規則的な社会ルールを身につける期間があり、また中国では大学生は全寮制である。

五 まとめ 現実生活を過ごす上では念仏の障りとなるものはすべて廃捨するのが必要であるが、現実生活を守って行くために称名念仏がそこなわれることのないため、その上に戒が執り行われたのではないか。そしてこれが機縁となつて念仏に対する態度、専修念仏へ導かれる意味があつたと考えられる。

(註略す)